

# 0 理念・目的・教育目標

## 進捗状況報告

1. 経済学の導入教育の中心をなす「経済学の基礎A・B・C」については、2008年度から、基礎A・Bにそれぞれマクロ経済学とミクロ経済学の性格付けを明確にした。授業方法としては、関連する最近の内外の経済事象を紹介して、経済問題に対する学生の興味と関心とを喚起するとともに、その理論的な分析や解説を提示して、経済学を習得することの重要性と醍醐味を実感できるように努めている。そのため、当初の方針であったテキスト作成よりも毎年のレジュメ改訂版で対応するのが現実的だと考えている。エクササイズの時間の設置など、その他の授業方法の工夫も従来どおり踏襲している。

基礎Cは、2009年度から、A・Bと重複しているテーマを整理し、市場経済だけでは解決の困難な問題や歴史的なアプローチの必要とする問題を扱うように改訂した。授業方法はA・Bと同様である。A・B・Cとも、学部教員全員がローテーションで担当する体制も堅持している。

2. 2009年度から、いわゆる専門教員の基礎ゼミナール（1年生担当）の担当クラス数を増加して、語学・宗教関係教員のそれと同数にし、両者が文字通り共同で1年生の導入教育を行う体制にした。

3. 学部教育と大学院教育の連携・連続性をこれまで以上に強めるために、2009年度から学部の経済理論科目に中級レベルのマクロとミクロの科目を新設するとともに、経済学で使用する初級レベルの数学関連科目を強化することになっている。

4. 英語教育では、2005年度からTOEIC-IPを引き続きおこない、その成果として毎年平均点の上昇を見ている。

またTOEICオフィシャル・テストを自発的に受験する学生の数が次第に増加していることは、全学部的なIPテスト導入の副次的効果として評価している。

2009年度からスペイン語の導入がなされ、英語以外の語種の選択機会はさらに広がる。これを機会に、独・仏・中・朝鮮・スペイン語でも、外部試験の得点を参考に学年ごとの数値的な到達目標を明示して、語学力向上の目安とするようにした。

5. 長年の懸案であった外国語担当教員の専門ゼミナールの担当は、2009年度から導入の予定である。これによって経済学の専門教育と人文科学を基礎とした国際的な幅広い視野や高い教養の育成とを結びつける基盤が整えられる。

6. ゼミナールの定員問題は、ゼミナールの選択化、外国語教員の専門ゼミナールの担当等によって、2009年度以降減少化（およそ20人）の目処がたった。

7. チャペル・アワーの時間は、年間を通して月曜日から金曜日まで毎日さまざまな企画を学部チャペルで実施し、大学（学院）のキリスト主義教育の現代的な実践を試みている。

## 学内第三者評価

経済学の導入教育の中心となる「経済と経済学の基礎A・B・C」の性格付けと内容の明確化がされたこと、専門教員による基礎ゼミナールの充実（クラス数増加）、および、TOEIC-IPの平均点の毎年の上昇は、大いに評価できる。ただし、TOEIC-IPについては、2007年度の学内第三者評価結果において、今後、点数を記載し実証していくことが求められている。

また、計画段階であるが、2009年度から予定されている学部教育と大学院教育の連携・連続性をより拡充するためのカリキュラム改編、外国語担当教員の専門ゼミナールの担当による少人数教育と国際的視野の拡大、スペイン語の導入など、意欲的な試みは期待できる。

なお、学外委員からは以下の意見があった。

大学創設以来の経済学部の理念・目的、これらに基づく教育目標が、体系的にしっかりと組み立てられ、ホームページ上に分かりやすく明示されている。これらを実現すべく、教育活動の改善を図るべく意欲的な取組が行われていることは、評価できる。

語学教育の充実、外国語担当教員の専門ゼミナール担当とゼミ定員の減少については、昨年度から前進が見られ、関係者の努力の跡が伺われる。